幼稚園教育課程編成の現状と課題（1）

― A市立公立B幼稚園の教育課程の現状を通して ―

A Study into the Formulation of Education Curricula at Japanese Kindergartens

次世代教育学部教育経営学科
松田　智子
MATSUDA, Tomoko
Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

京都光華女子大学短期大学部
土谷　長子
TSUCHIYA, Hisako
Kyoto Koka Women's University, Junior College

キーワード：教育課程の編成，幼稚園教育要領，公立幼稚園

要旨：幼稚園の教育課程は，それぞれの園において編成される。教育目標を実現するために子どもの発達の実態や地域のニーズに配慮しながら編成される。本研究ノートの目的は，幼稚園教育課程の意義を確認するとともに，編成における配慮事項を整理することである。さらにA市の公立幼稚園B園の教育課程の事例を参考にしながら，公立幼稚園における教育課程の現状を検討する。さらに教育課程がどのように編成され，実施後どのように評価・改善され，次年度の教育課程上にどのように影響を与えているのかについて，園の研究紀要を基に検証する。その過程で，幼稚園が日常の保育と，年度当初に作成する教育課程を結びつけるために，どのような方策をとるのかを提案するものである。

1　はじめに

幼稚園では幼児期にふさわしい生活を通して，幼児一人一人が幼稚園教育要領に示されたねらいや内容を確実に身につけることが求められる。「幼児期にふさわしい生活」とは，幼児に好きなことを好きなようにさせているだけの生活ではない。幼児の生活や発達を大切にして見通しを持った教育を行うために，幼稚園では教育の全体計画としての教育課程が編成されている。

学校教育法第79条に「幼稚園の保育内容に関する事項は，前２条の規定に従い，監督庁がこれを定める」とある。前２条とは，幼稚園の目的並びに目標に関する条であり，監督庁とは文部科学大臣である。学校教育法施行規則第76条に，幼稚園の教育課程は幼稚園教育要領によることと定めている。幼稚園においては，法令および幼稚園教育要領の示すところに従い創意工夫をいかし，幼児の心身の発達と幼稚園および地域の実態に対応した適切な教育課程を編成しなければならない。本研究ノートでは，教育課程編成の基本的な考え方を確認するとともに，A市の公立幼稚園の教育課程の実際を通して教育課程編成における公立幼稚園の現状を把握する。

2　教育課程編成についての基本の考え方

教育課程は各幼稚園において入園から修了までの教育機関の全体に渡り，どのようなことを目標にしてどのように教育していくかを示す全体計画であり，次の３つのことを示すことになる。

① 目指す幼児像を含んでいる教育目標
② それぞれの発達時期に育てたい具体的なねらい
③ 保育者が指導し，幼児が体験する具体的な活動内容

幼稚園における教育課程の編成において重要なことは３つある。第１には幼児教育は幼児のさながらの生活を大事にし，入園から修了までの教育期間を見通し，幼児の生活経験や発達をもとに具体的なねらいや内容を組織することである。

第２は教育課程の編成は，各園の全教職員の協力のもとに園長の責任において編成するということである。教育基本法や学校教育法等の法令や幼稚園教育要領の内容を十分理解するとともに，それぞれの幼稚園が積み上げてきた実践を整理し，各幼稚園の実情に応じた教育課程を編成しなければならない。

第３は各園の教育課程の編成においては，幼児教育

の課題のみならず児童期以降の学校教育の課題を見通しつつ，幼稚園教育の課題を把握することである。幼稚園から小学校へ「円滑に移行」するためには，単に小学校教育の内容を先取りして教えればよいというわけではない。就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことを通して，思考力や主体的な態度の基礎を培い，小学校入学以降の生活や学習の基礎を育成することが求められている。

３　公立幼稚園教育課程編成の実際

これまで教育課程とはなにか，その編成の基本的考え方について述べてきたが，実際の幼稚園ではどのように編成されているのだろうか。ここでは教育課程編成の基本的な考え方を再確認するとともに，Ａ市の公立幼稚園の事例を挙げながらその編成の過程を考えることにする。

（１）教育課程は各園で編成する

各園の教育課程は全国共通の様式や決められたものがなく，各園の幼児や地域の状況を考慮し，各園ごとに独自の教育課程が作られる。しかし，公立幼稚園では市町ごとに教育課程の基底を作成し，それを基に各幼稚園が特色が出された独自の教育課程を編成する場合が多い。

なぜなら，地方教育行政の組織及び運営に関する法律で，教育委員会は幼稚園の教育課程に関する事務を管理，執行し（第23条第５号），法令または条例に違反しない限り教育課程について必要な教育委員会規則を定めるものとする（第33条第１項）とされているからである。教育委員会はその学校管理権に基づいて教育課程の基準を設定し，必要に応じて教育課程の編成について具体的な指示をする権限を有しているからである。

一方私立の幼稚園では，条例等での拘束力がないので，実際的には教育課程が編成されていない場合もある。2007（平成19）年にベネッセ次世代育成研究所が行った，全国的な幼稚園基本調査では，公立幼稚園の96.8％が教育課程を編成しているが，私立幼稚園では84.2％しか編成されていない。立派に文章化された教育課程さえ存在すれば，保育が素晴らしいというわけではないが，保育の全体計画として不可欠なものである。

（２）Ａ市の教育課程の基底の考え方

Ａ市には公立幼稚園が９園あり，その教育課程の基底は≪図１≫のように定められており，この基底自体も数年ごとに見直しをされている。Ａ市は兵庫県の阪神間にある山と海とに囲まれた緑豊かで四季の移り変わりが存分に楽しめる恵まれた環境にある。Ａ市立公立幼稚園教育研究会の紀要には，この地域の幼児の実情が次のように述べられている「子どもたちは与えられたことに意欲的に取り組もうとする穏やかで素直な良さを持っているが，自ら考えて行動することができにくく，人との衝突を避け，困難に出合ったときにすぐ諦めてしまう姿が見られる。また，地域では集団遊びや異年齢の子どもたちと遊ぶことが少なくなり，家庭では子ども中心の生活から過保護になっている状況も窺える。子どもたちができるだけトラブルに出合わないように，また保護者の願い通り育てたいという思いから，子どもの主体性や自発性が伸びにくい等の課題が出てきている」

このようなＡ市の環境と子どもの発達を配慮しながら基底が作成されている。この基底をもとに，各園は独自の教育課程を編成し，さらに年間指導計画や期の指導計画を作成する。

Ａ市の基底≪図１≫の様式について，若干の説明を加える。基底は２年間の幼稚園生活を見通して，成長の個人差の大きい４歳児を５期に分け５歳児は３期に分けている。一番上段に学期末までに育つ幼児の特徴的な姿をイメージしながら，その姿に迫るための重点的な遊びのねらいが記載されている。

例えば４歳児のⅣ期になると，幼児は「自分の好きな遊びを見つけて楽しむ」時期から，「友達とかかわり色々な遊びを楽しむ」ようになっている。友達と共通の目的をもって遊びを展開しようとする時期には，保育者の遊びの指導が重要になる。他方，自分だけの世界を楽しもうとする動きもある。それには目的があり，やがては友達の刺激を受けて，自分なりの課題を設定し，それを乗り越えようとする遊びになる。すると個々の遊びに対しての指導も必要になるので，遊びに対してのねらいが２つになる時期である。

Ａ市の基底では，このような動きを把握しやすくするために，内容を次の３つの視点で整理している。

① 人とかかわる力
② 環境とかかわる力
③ 自分とかかわる力

さらに幼稚園教育要領の５つの領域がバランス良く配置されているかを確認するために，それぞれの内容を

芦屋市立幼稚園教育課程基底

年齢	4歳児												5歳児											
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
期	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ			Ⅳ		Ⅴ			Ⅵ				Ⅶ					Ⅷ		
ねらい	園生活に親しみ，安定して遊ぶ		自分の好きな遊びを見付けて楽しむ		友達と一緒に遊びを楽しむ			友達とかかわりいろいろな遊びを楽しむ		友達と考えを出し合って遊びをつくる			年長児になった喜びや自覚をもち，自分なりの目的をもって遊びを楽しむ				自分の力を発揮しながら，友達とつながりを深め，試したり工夫したりする					友達と共通の目的をもって取り組み，達成していく楽しさや満足感を味わう		
内容 生きる力の基礎づくり 人とかかわる力	教師や友達，年長児に親しみをもつ（健康）（人間）		友達の思いに気付く（人間）		友達の気持ちを感じる（人間）			友達と互いの思いや考えを出し合う（人間）（言葉）（表現）					新しい友達や年少児，地域の人，教師等に親しむ（健康）（人間）				友達とルールを考えながら，力を合わせたり，競い合ったりする（健康）（人間）					クラスとしてまとまりや友達との心のつながりを感じる（人間）（言葉）		
	園生活の決まりを知る（健康）（人間）		生活の中の約束やきまりを守ることの大切さを知る（健康）（人間）		簡単なルールを守って遊ぶ（健康）（人間）			友達と気持ちを合わせて遊ぶ（人間）		友達とイメージを共有して遊ぶ（人間）（表現）			自分の考えを話したり，友達の意見を聞いたりする（人間）（言葉）				友達と互いの思いや考えを認め合いながら，遊びを進める（人間）（言葉）					卒園する喜びや感謝の気持ちをもって，様々な人に積極的にかかわる（人間）（言葉）		
	生活の中で必要な言葉を知る（言葉）		教師や友達の話を聞くことの大切さを感じる（言葉）					友達の話に関心をもち，聞いたり話したりする（言葉）																
	異年齢に親しみをもつ（人間）																							
	よいことや悪いことがあることに気付く（人間）												よいことや悪いことがわかり，考えながら行動する（人間）											
	地域の人と触れ合う（人間）												地域の人や自分の生活に関係深い人々に親しみをもってかかわる（人間）											
環境とかかわる力	身近な春の自然に触れる（環境）（言葉）（表現）		梅雨期や夏の自然に親しむ（環境）（言葉）（表現）		秋の自然に親しみ，遊びに取り入れる（環境）（言葉）（表現）			冬への移り変わりに気付く（環境）（言葉）（表現）		冬の自然に触れ，春の訪れに興味や関心をもつ（環境）（言葉）（表現）			身近な生き物や自然に親しみ，触れたり世話をしたりする（環境）（言葉）（表現）				自然の美しさや営みの不思議さを感じ，遊びに取り入れ，実りを喜んだり表現したりする（環境）（言葉）（表現）					四季の移り変わりから，命のつながりや大切さに気付く（環境）（言葉）（表現）		
	野菜等を育て，収穫や食べる喜びを知る（健康）（環境）																							
	日本の伝統的な行事や伝承遊びに触れる（人間）（環境）（言葉）									震災の話を聞き，命の大切さを知る（健康）（人間）（環境）（言葉）			日本の伝統的な行事や伝承遊びを生活に取り入れる（人間）（環境）（言葉）									震災の話を聞き，命の大切さを感じる（健康）（人間）（環境）（言葉）		
	園周辺に出掛け，生活を広げる（人間）（環境）（言葉）																							
	身近な遊具，用具，素材に触れる（健康）（環境）				いろいろな遊具や用具，素材を使う（健康）（環境）					試したり，工夫したり，遊びに必要な素材を選ぶ（環境）（表現）			身近に起こるいろいろな事象に関心をもち，試したり調べたりする（環境）（言葉）				遊具や用具を目的に応じて使う（環境）（言葉）（表現）					日常生活の中で必要な数量や標識，文字などに関心を深める（環境）（言葉）（表現）		
自己とかかわる力	自分の持ち物の始末や片付けの仕方を知る（健康）		身の回りのことを自分からしようとする（健康）		戸外で伸び伸びと身体を動かす（健康）			寒さに負けず，元気に遊び，健康な生活習慣を身に付ける（健康）					年長児としての生活の仕方や態度を身に付ける（健康）				積極的に身体を動かし，運動遊びに挑む（健康）					生活の見通しをもって，自分の役割を果たし，やり遂げる充実感や表現する喜びを味わう（健康）（表現）		
	好きな遊びを見付ける（健康）（表現）		気の合う友達を見付ける（人間）（言葉）（表現）		いろいろな遊びやトラブルを通して友達の思いを知る（人間）（言葉）			自分なりに考えたり，試したりする（環境）（人間）		友達の支えを感じ，自分なりがんばる（人間）			自分の思いや気付いたことを相手に伝える楽しさを知る（言葉）				感じたことや考えたことをいろいろな方法で表現する（言葉）（表現）					小学生になる期待や自覚をもち，自信をもって行動する（健康）		
										年長への期待をもつ（健康）			いろいろな遊びの中で葛藤やトラブルを乗り越えようとする（人間）											
	絵本に親しむ（言葉）				絵本や物語の世界に夢を広げ表現する（言葉）（表現）												仲間意識が芽生え，達成感を味わう（人間）					絵本や物語を生活や遊びに取り入れる（言葉）（表現）		

図1

5つの領域と連動させ，括弧書きで領域を付記するという工夫がされている。

（3）教育課程は保育者全員と協力して，園長の責任で編成する

教育課程は編成の責任者は園長であるが，園長の考えのみで編成されるものではない。幼児と接する保育者と協力して作られてこそ，日々の保育の指針となる。それゆえ保育者には「教育課程を編成するのは自分たちである」という主体的な姿勢が求められる。

全員で協力して編成するとしても，園長の教育的なリーダーシップは，不可欠である。教育課程は園長の幼稚園教育に対する価値観や具体的な教育内容の重点方針に影響を受けることが少なくない。例えばA市の公立幼稚園の園長が変わった際に，筆者は園の保護者から「園長が変わると，こんなに保育が変わるのですね」と驚きの声を聞いたことがある。「前園長は表現活動を保育の領域で大切にしておられ，自然環境に接する際にも園内の小さな落ち葉や草木をじっくりと観察し，それを表現する活動を大切にしておられた。現園長は地域と連携する保育を大切にしておられ，園外に出て地域の公園で環境に関わって遊ぶなどの活動をすることが増加した」と聞いた。

（4）目標とする幼児像を保育者全員で討議して，共通理解する

目標とする幼児像とは，こんな子どもに育ってほしいという保育者や保護者や地域の人々の願いである。このような子どもに育てなければならないという画一的なことを意味するものではない。幼稚園教育要領では，「幼児期の発達の特性を踏まえて，幼稚園教育は環境を通して行う」と位置付けている。環境と通して行う教育とは，保育者が幼児に直接働きかけるのではなく，幼児に体験させたい内容を環境の中に組み入れて，幼児の主体的な活動がうまれることを待つという教育である。これは，幼児にしたいようにさせる放任とは全く異なるものである。具体的には，保育者はまず幼児の生活や発達を見通し，物的・空間的な環境を構成し，幼児が主体的な活動ができるように支援する。さらに保育者は幼児が環境と関わってさまざまな活動を展開するなかで，幼児一人一人が自らの発達に有意義な経験が得られるように，具体的な援助を行うことである。

（5）幼児の発達を見通して，その時期に応じた具体的なねらいと内容を考える

教育課程とは，入園から卒園まで幼児たちの経験す

るもの全てであるから，発達を見通すとは，幼稚園生活全体を通して幼児がどのように発達するか，どの時期にどのような生活が展開されるか等を長期的にみて予測することである。次に，その発達の各時期にふさわしい生活が展開されるように適切なねらいと内容を設定することが大切である。

教育課程はこのように幼稚園生活の大まかな道筋となるものであるから，あまり簡単にころころと変わるというものではない。しかし，固定的なものとして考えずに，常に討議され見直しがされなければならないものでもある。

４　Ａ市のＢ幼稚園の教育課程の実際

ここから，教育課程の編成の過程を，実際の幼稚園の例を挙げながら見ていくこととする。Ｂ幼稚園はＡ市全体のめざすこども像「未来に向かってたくましく生きる幼児」，具体的には「ありがとうを感じる子」「しっかり自分を見つめる子」「やる気いっぱい元気な子」という現状を受けて，Ｂ園独自の教育目標を定めている。

（１）2010（平成22）年の教育課程

Ｂ幼稚園はＡ市の北に位置する落ち着いた住宅街にある小規模の園である。2010年度は，年少４歳児２クラス年長５歳児２クラスの合計４クラス規模であった。保護者の教育への関心は高く，住民が運営する活発な活動組織（コミスク）も存在する地域である。筆者は，地域から幼稚園教育への注文も多いが，その一方では幼稚園を信頼し支えていこうとする文化が育っている地域であると園長から聞いている。

2010（平成22年）のＢ園の教育目標は，前述のＡ市全体の育てたい子ども像を受けて「元気なからだと豊かなこころをはぐくむ」と設定されていた。育てたい具体的な４つの子ども像について，以下のようにＢ園の紀要に述べられている。

・生き生きと遊ぶ幼児
・豊かに感じる幼児
・自分の思いや考えを表現する幼児
・思いやりのある幼児

上記の育てたい幼児像の３番目にはＡ市の目指す幼児像の「たくましい」という文言を受けるとともにＢ園の幼児の実態を重ね合わせたものと考えられる。

（２）2010（平成22）年の指導計画

目標に対する指導の重点は６つ挙げられているが，その中で他の園には見られない特徴的なものは，「幼児が絵本や物語などに親しむことで豊かなイメージをもち，言葉に対する感覚を養っていけるように読書活動の一層の充実を図る」である。これは2010（平成22）年から小学校で本格的に実施された新学習指導要領改訂の柱である「言語力の育成」という文部科学省の方針に留意して作成された指導の重点である。幼稚園の幼児の発達や地域の実情だけでなく，日本全体の教育の方向性と小学校への接続を配慮されて設けられた事項であるといえる。

これをさらに具体化するための研究内容（具体的な保育における支援）がＢ園の紀要に述べられているので，少し長いがそのまま紹介する。

【豊かな言葉に触れる環境を構成する】
・自分の気持ちを伝える言葉や友達と関わるための必要な言葉などを状況に応じて選び，使い方を具体的に探り，幼児に伝える。また幼児や友達や生き物に対して思いやる言葉を受け止め，人とのかかわりにつながるようにする。
・幼児が美しい言葉や正しい言葉を身に着けたり，話の世界を思い描き，夢を広げ人の気持ちを思いやる心を育まれることを願い，幼児の実態や成長に合わせた本を選ぶ。
・誕生会の先生からの話のプレゼントや教育ボランティアの方の本の読み聞かせを年間の生活に位置付け，物語から心豊かな言葉に触れる機会を幅広く持つ。
・昨年度成果が見られた「朝の本読み」の時間や「親子絵本の会」を継続する。親子絵本の会の本読みカードを公開し，保護者の関心を広げ，ニーズに応えられるようにする。
・「月の歌」では季節や成長とともに，わらべ歌や言葉の美しさが伝わる歌を選び，思い描きながら，楽しく歌えるように保育する。

文言が十分に整理されず，あれもこれもと書きすぎている個所もあると思われるが，保育者が目の前の幼児を見つめ討議を重ねてきて，試行錯誤しながら作成されたと思われる。

（３）指導計画と言葉のカリキュラム

Ｂ園は，教育課程に基づいて年間指導計画を作成す

る際に，他の園に見られない「言葉に触れる」という項目を各期に設け，そこでは具体的な支援を述べている。ここでは，幼児の成長に対応して生活の中で出会わせたい言葉を具体的に取り上げている。この選ばれた言葉は，たんに幼児の発達に合致しているにとどまらず，Ｂ園の育てたい幼児像（教育目標）を反映している。例えば，４歳のＩ期（４～５月）では「あいさつ（おはよう，さようなら，いただきます，ごちそうさま）」「遊びの中の必要な言葉（入れて，貸して，どうぞ，ありがとう，ごめんね）」「友達や教師の名前を覚える」「身近な花や虫の名前に興味を持つ」の４点が挙げられている。これは，Ｂ園の育てたい幼児像「自分の思いや考えを表現する幼児」を体現するものである。これらは遊びにも取り入れられ，子どもの名前を覚える遊びをこの時期に入れている。さらに，この時期にこそ触れあわせたい絵本名も記述されている。例えば「ぞうくんのさんぽ」「ねずみくんのチョッキ」「そらいろのたね」「あおくんときいろちゃん」などである。これらはＡ市の「子どもの読ませたい図書リスト400選」にも含まれている。

さらにＢ園では言葉の発達を焦点化した２年間を見通した詳細な言葉のカリキュラムも作成している。

５　教育課程の評価・改善

教育課程に基づいて指導計画を作成し，日々の教育活動を展開することが，教育課程の実施である。その評価は，実施の状況をさまざまな視点で振り返り，幼児がどのように変容し，保護者にとって，地域にとってどのような成果があったのかを検証することである。また，改善の方向を検討して次年度の教育課程に活かすことが重要である。ここでは具体的にＢ園が2010（平成22）年の教育課程の評価の結果，どのように次年度活用したかを検証することを通して，教育課程の評価・改善について考えることとする。

（１）Ｂ園の2011（平成23）年の教育課程

教育目標は「元気なからだと豊かなこころともった幼児の育成」であり，前年度と比較すると，元気なからだ」「ゆたかな心」の育成というキーワードに変化はない。しかし，育てたい幼児像は，以下のように変化している。

①　健康で明るい幼児
②　自分で考え行動する幼児
③　豊かに感じる幼児
④　友達と響きあい，思いやりのある幼児

前年度の子ども像と比較すると③の「豊かに感じる幼児」は同じである。②は前年度の「自分の思いや考えを表現する幼児」の姿の行動化をねらいとして「自分で考えて行動する幼児」に変更されている。④の「思いやりのある幼時」も「友達と響きあい，思いやりのある幼児」となり，幼児同士のかかわりを通して保育を進めるという指導の方向性が見て取れる。①の「生き生きと遊ぶ幼児」は「健康で明るい幼児」と同様であまり幼児の具体的な姿が浮かび上がってこない。

（２）Ｂ園の育てたい幼児像の変更について

Ｂ園の教育目標は変わっていないが。育てたい幼児像が若干変化している。この育てたい幼児像の変更の根拠について，Ｂ園の研究紀要の研究課題設定理由欄に教育課程の評価とともに次のように述べられている。「昨年度は言葉に焦点を当て，毎朝の絵本の読み聞かせや地域のボランティアによる読み聞かせ，親子絵本の会などを実践し…集会の時に集中して話を聞く姿が見られたり，自分の思いを言葉で伝えたりしようとする成果としてあがった」とある。つまり，友達や教師と心が通い合う言葉を育む環境を整えてきた昨年度の取り組みが，幼児の聞く姿勢や集中力を育んだと述べている。この評価が上記の②「自分で考えて行動する幼児」と④の「友達と響きあい」の文言の根拠となっていると考える。

Ｂ園の教育課程変更は，昨年度の保育者による教育の成果だけでなく，園の実態の変化にも影響を受けている。Ｂ園は2011（平成23）年度は，園児数が減少し初めて年長１学級（22名）年少１学級（29名）の単学級の園になった。単学級であることを良さととらえて，友達とのかかわりを大切にして「協同する体験」や「自分の気持ちに折り合いをつける」などに視点を当てて幼児像を考えている。また少人数の園だからこそ，どの保育者もすべての園児を理解でき，また園児もすべての保育者に親しみを感じることができるように，年長児と年少児の枠を超えた，互いに刺激を受けて遊ぶことができる縦割りの保育の時間を定期的継続的に取り入れた。それに伴い年間指導計画のねらい・内容に「協同にかんすること」という視点が付記された。

６　教育課程編成上の今後の課題

（１）情報開示で保育の説明責任

「環境を通しての教育」は，一見すると幼児があちこちで勝手に遊んでいるように見える場合があるので，保護者にそのねらいが理解されにくい。保育者が幼児の発達をどのように把握し，何をねらいとして，どのような環境を用意して，活動が成立しているのか分かりにくい。教育の成果も含めて，保護者に根拠を示して見える形で情報の発信をしていくことが重要である。そのためにも，教育課程をについて，年度当初と終わりにはきちんと保護者に説明をできるようにしなければならない。

（２）各行事ごとに，教育課程にたちかえる

各幼稚園では，各行事が終わるごとに保護者からアンケートを取り，自己評価などを行って来年度に向けての改善の方向をさぐる。しかし，行事の反省会のレベルにとどまりがちである。行事の目的，園児の育ちはどうであったかと，教育課程の目標・目指す幼児像に立ち返ることを忘れてはいけない。

７　おわりに

幼稚園教育課程の編成やその評価・改善についてＡ市の事例をもとに，検証を行い課題を提起した。幼稚園教育における教育課程は，幼稚園における教育についての根幹となるべき指針となるものである。したがって，その幼稚園における教育期間全体を通しての子どもたちの育ちを見据えたものとするために，抽象的な表現になりがちである。つまり，「具体的なねらいや活動」を示しているとはいっても，保育計画のように具体的な保育の内容を示したものではないため，日々の保育に直接反映していることが明確には見えにくいものであることも確かである。

公立幼稚園の場合は，市町村教育委員会によって示される教育課程の基底があり，それに基づいて各園によって編成されるという経緯を踏まえると，それぞれの市町村が目指す子ども像を実現するために，幼児がいる家庭が属しているより身近な地域の中で，その実態に即した具体的な目標やねらいが表されることが求められるであろう。それらの具体的な目標やねらいを保育課程として保護者に示すことによって，保護者との連携を図っていかなければならない。つまり子どもが幼稚園だけではなく家庭とともに連続した時間の中で育っていることをともに共通理解していくことである。そのための情報開示であり，行事の振り返りについてはその点に留意しつつ，保護者と子どもの育ちをともに確認できるよう行っていく必要があろう。

また評価・改善にあたっては，年ごとに策定される教育課程はすでに在籍する幼児のためのものでもあることを念頭に，過年度の教育課程が目指したものと齟齬のないものを作成しなければならない。教育課程は幼稚園に在籍する子どもたちの全体計画であると同時に，一人ひとりの幼児の育ちを保証することも忘れてはならないのは言うまでもないことであろう。

【引用文献・参考文献】

１）芦屋市立幼稚園教育研究会『阪神支部幼稚園教育研究会紀要』，Ｐ１，2010
２）芦屋市立朝日ケ丘幼稚園：『園の経営』，ｐ1-3 2010，2011
３）芦屋市立朝日ケ丘幼稚園：『園の経営』2011
４）芦屋市立西山幼稚園『園の経営』2010
５）芦屋市立西山幼稚園『園の経営』2011
６）磯部裕子著（2007）『教育課程の理論』崩分書林
７）小田豊・神長美津子編著（2003）『教育課程総論』北大路書房
８）民秋言編（2008）『幼稚園教育要領･保育所保育指針の成立と変遷』崩分書林
９）戸田雅美・佐伯一弥編著（2011）『幼児教育・保育課程論』建帛社
10）西窪禮造（2003)『幼稚園教育の教育課程と指導計画』ぎょうせい